

## 「七十二人の派遣」（ルカによる福音書一〇章一〜一六節）

### 1 七十二人

今日の聖書箇所は七十二人の派遣という話です。他の福音書にはありません。ルカにだけ伝えられています。

ルカは、七十二人が帰って来た、しかも喜んで帰って来た（一七節以下）ところまで書いていますが、今日はその前半、一六節までを取り上げます。

その後、主はほかに七十二人を任命し、御自分が行くつもりすべての町や村に二人ずつ先に遣わされた。そして彼らに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださいるように、収穫の主に願いなさい」（一〜二節）。

この七十二人について、イエスの弟子という呼び方をしてもよいと思います（ここではそういう名称は何もありませんが）。ただ、私どもが知っている十二人の弟子とは区別されます。

十二人の弟子、つまりペトロやヤコブ、ヨハネたちですが、彼らはイエスによってとくに使徒という呼び名を与えられた弟子たちです（六・一三）。いま読んだ最初の節に「ほかに七十二人を任命し」とありましたが、「ほかに」というのは、十二人の「ほかに」という意味です。

単純に弟子の数ということかというと、使徒言行録には（これもルカが書いたものですが）、イエスを天に見送ったあと、使徒を中心に集まっていた人数は「百二十人ほど」（一・一五）であったと書いてあります。

十二人のほかに七十二人、そして百二十人、イエスと共に神の国の宣教をになう人たちが増えて行きます。このペトロを中心とした百二十人が、のちに最初の教会を形成したことはいうまでもありません。

ここに来て新しい弟子が加えられ、増えていきます。先週私どもは、前の段落でガリラヤを出たイエスが、サマリアに行き、そこからさらに進んだところで三人の人が弟子になろうとしたことを聞いています。例えばそのように、新しく弟子が増えて行きます（五七〜六二節）。ただこの三人については、実際に従ったのか、従わなかったのか、イエスの要求の厳しさを考えると、最終的に従って行つたと、簡単には言えないようにも思いますけれど、いずれにせよ、群れに加わろうとする人が多く出て来たことは確かです。

弟子が増えたことには理由があります。その理由、原因はしかし、イエスの側にあるように思います。イエスがガリラヤを出てエルサレムへ、十字架へと実際に歩み始めたことが、その原因です。

どういふことかといえば、エルサレムへの道を辿りはじめたイエスが、神の救いの時は来た、神の国の到来は近いという思いを強くいただいたということです。ただ宣べ

伝えるだけの時は過ぎた。収穫の時、刈り入れの時は近づいた。急いで、人々を救いへと、神の国へと獲得しなければならぬのです。その収穫の時の接近が、弟子の数を増やしたのです。

農作物の収穫期は、一般に一気に訪れるものです。気がつくとき色づき、実っています。刈り入れの時を逃してはなりません。「収穫は多い」。しかしこの時を逃さないためには「働き手」もまた多く必要です。こうして、エルサレムへと向かうイエスの決意が多くの人びとを召し、奉仕へと誘ったのです。

派遣と言えば、私どもは、十二人の使徒の派遣のことを、前章、九章のはじめで聞いています。そこで十二人に与えられた力と権能、すなわち「悪霊に打ち勝ち、病気をいやす力と権能」が七十二人にも与えられます（一〇・一九）。また宣教に奉仕する者の心構えも与えられます。それだけでなく、そもそも何を宣べ伝えるのか、それも、十二人のときと同じように七十二人にも与えられます。しかしそこに、いまでもし違いがあるとすれば、それは、刈り入れの時の近さ、その切迫した思いにあります。それがいつそう強くなります。あれかこれか、神の国を受け入れるのか、受け入れないのか、七十二人は宣教によってそれを問うのです。

## 2 遣わされる

救いが近いというこの緊迫した思い、この点で、七十二人の派遣は、十二人の使徒の派遣（九・一以下）より強いものです。しかし、いま申しましたように、宣教への派遣としては同じです。

行きなさい。わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに小羊を送り込むようなものだ。財布も袋も履物も持って行くな。途中でだれにも挨拶をするな。どこかの家に入ったら、まず、「この家に平和があるように」と言いなさい。平和の子がそこにいるなら、あなたがたの願う平和はその人にとどまる。もし、いなければ、その平和はあなたがたに戻ってくる。その家に泊まって、そこで出される物を食べ、また飲みなさい。働く者が報酬を受けるのは当然だからである。家から家へと渡り歩くな（三〜七節）。

この部分には、イエスによる派遣の言葉につづいて、派遣される人の装備、あるいは心構え、またどのように務めを遂行するかなど、イエスの懇切な指示、教えが記されています。

ここにある指示、教え、それが当時どのような意味をもっていたのか、もちろん十分には分かりませんが、いまもつとも重要なこととして私ども聞き逃してならないのは、何よりもイエスの派遣の言葉、「わたしはあなたがたを遣わす」という派遣の言葉、言明です。

この「遣わす」という言葉、この言葉で思い起したいのは、聖書では、神が御子イエスを世に遣わす、というとき用いられることです。今日の箇所の後、一六節でも使われています。「わたしを遣わされた方」。「わたし」とは御子イエス、御子を遣

わされた方とは、父なる神です。

それなら御子は、どこに遣わされたのでしょうか。この世に、人間のもとに、私ども、もともと神に背いた罪深い私どもところに遣わされたのです。イエスは、宣教に遣わされる七十二人を、御自分と同じように考えておられます。それは「狼の群れに小羊を送り込むようなものだ」と。イエスはこの困難を知っています。それを知って祈っていただきます。

例えば、先週私ども読んだところですが、サマリア人の村に入ったイエスも、準備のために遣わされたヤコブもヨハネも「歓迎」されませんでした(五三節)、拒絶されました。神の国の宣教は、神に味方する人に対してだけなされるものではありません。反対する人、受け入れない人にもなされます。そしてそのようなときであっても私どもを支えるのは、「わたしはあなたがたを遣わす」という派遣の言葉であり、「行きなさい」という命令の言葉なのです。

もう一つ、今日の箇所から、私ども覚えておきたいのは、どこに、あるいはだれに私どもが遣わされるにしても、「まず、『この家に平和があるように』』と言いなさい」という言葉です。

「まず」とあります。何はさておき最初に、そして何より私どものほうから平和があるようにと平和の挨拶をするのです。平和、シャロームです。神にある平和そして平安。シャロームは、聖書の世界では、第一に挨拶の言葉です。イエスが十字架につけられたあと、隠れるようにして一つところに集まっていた弟子たちのところに復活のイエスが来て発した最初の言葉、それはシャロームでした(「あなたがたに平和があるように」)でした。シャローム、それは挨拶なのです。

挨拶というと、私ども日本人は、一つの社交辞令、人と人との関係を円滑にするもの、やはりどこまでも言葉の問題と考えます。しかし聖書では、たとえ挨拶でも、そこで口にされる事柄は、すなわち、平和は、音とともに存在もなくなってしまうものではないのです。

シャローム(平和、平安は)は一つの実体、一つの領域のことです。「平和とは平和の挨拶を受ける者の中に受け入れられ、その中で安全に守られる一つの領域である」(ヴェスターマン)。平和の挨拶と共に、平和は相手に移り、その人も共に神の平和と平安の中に生きるようになるのです。

むろん平和の挨拶が受け入れられないこともあるかも知れません。それは「あなたがたに戻ってくる」とここで言われています。たとえそうであっても、シャロームと語りかけること、これが、ここでイエスが七十二人に教えた宣教の始まりであり、また宣教そのものなのです。

### 3 和解への奉仕

神の国の宣教がいつも歓迎されるものでないことは、イエスも、むろんよく知っています。それゆえ次のように語っています。

どこかの町に入り、迎え入れられたら、出される物を食べ、その町の病人をいや

し、また、「神の国はあなたがたに近づいた」と言いなさい。しかし、町に入っても、迎え入れられなければ、広場に出てこう言いなさい。「足についたこの町の埃さえも払い落として、あなたがたに返す。しかし、神の国が近づいていることを知れ」と。言っておくが、かの日には、その町よりまだソドムの方が軽い罰で済む（八〇一二節）。

イエスはここで、神の国の宣べ伝えが、受け入れられたときと、受け入れられないときのことを教えてください。

申し上げてきたように、七十二人の派遣は、十二使徒の派遣よりも、神の国到来の切迫度が増した状況でなされたことです。

ガリラヤ伝道するときになされた派遣ではなく、エルサレムに向かいはじめ、イエスが自らの十字架の死と復活、メシアの救いを確信してからなされたものです。それゆえここでは裁きの告知も彼らに託されています。それは容赦のないものです。カファルナウムの町に対しても告げられ、異教の町々（ティルスやシドン）のほうが、ガリラヤの町々よりも、神の国に近かったかも知れないと語られています。

厳しい裁きの言葉です。こうした厳しい側面を神の言葉がもっていることはその通りですが、しかし教会の宣教の言葉として考えたときには、それが前面に出ることは正しいとは思われません。

使徒パウロの言葉を思い起こします。

神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちに委ねられたのです。（Ⅱコリント五・一九）。

教会に託されているのは和解の言葉です。赦しの言葉です。なぜなら、裁きはすでに主イエスに下され、人の罪はあがなわれたからです。この和解の言葉を伝えるのが、教会の宣教です。教会は福音を宣べ伝えるのです。

さて最後に、もう一度、七十二という数字に戻ってみたいと思います。七十という読むテキストもありますが、ここではすべての邦訳と同じく「七十二」と読んでいいと思います。註解書などには、七十二という数字に対していろいろの関連が指摘されています。

興味がないわけではありませんが、結論として「七十二」は聖書では全世界、諸民族を象徴している数字のようです。そうするとそれは、全世界への派遣を予め示すものとして、同じルカが福音書の第二部として書いた、使徒言行録へとつながっているのです。十二人というのは、もちろんたんに数字ではなく、イスラエル十二部族に由来する神の民のことです。それが世界へと広がっていく、それを七十二という数字、そして七十二人の派遣は暗示しています。

いまイエスは弟子と共にエルサレムを目ざして進んで行きます。「エルサレムに向かって進む」、この言葉がこれからくり返されます（一三・一二、一七・一一、一八・三一、一九・一一他）。私どももまた、神の国を目ざして、イエスと共に旅する神の民として歩んでいきたいと思えます。

（二〇二一・一〇・一〇）